

検査情報月報



2012
7
月

横浜市衛生研究所

平成24年7月号 目次

【トピックス】

平成24年度 医動物・種類同定検査のまとめ(4～6月)	1
残留農薬検査(その1)	3
平成23年度薬事検査について	5
遺伝子組換え食品の検査	6

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成24年6月	7
------------------------------	---

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報(平成24年6月分)	12
-------------------------------	----

平成 24 年度 医動物・種類同定検査のまとめ (4~6 月)

医動物担当では、市民、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成 24 年 4 月から 6 月の種類同定検査件数は、8 件でした。すべて昆虫類で、内訳はハエ目(4 件)、チョウ目(2 件)、コウチュウ目(1 件)、チャタテムシ目(1 件)でした。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
ダイニングキッチン の椅子にみられた	 成虫、褐色、約 1mm	ヒラタチャタテ (チャタテムシ目コナ チャタテ科)	穀類や貯蔵加工食品(乾めん、ビスケット、干し魚など)、穀類や貯蔵加工食品(乾めん、ビスケット、干し魚など)を加害する。多湿を好み、カビを食べる。屋内に生息する最も普通の種。 世界各地に分布する。
家の周辺で大量発生 した	 雄成虫、黒色、約 13mm	ハグロケバエ (ハエ目ケバエ科)	幼虫は樹木の落葉層に群生する。 幼虫で越冬し、春に蛹化、成虫は 4~5 月にみられる。 本州から沖縄まで分布する。
家の周辺を大量飛翔す る	 雄成虫、黒色、約 13mm	ハグロケバエ (ハエ目ケバエ科)	幼虫は樹木の落葉層に群生する。 幼虫で越冬し、春に蛹化、成虫は 4~5 月にみられる。 本州から沖縄まで分布する。
店舗内で幼虫がみら れた	 幼虫、黒色、約 18mm	ミアメリカミズアブ (ハエ目ミズアブ科)	幼虫は畜舎、ごみ溜めなどから発生する。 成虫は植物の葉の上で休む。 本州、沖縄で普通にみられる。
自宅周辺を多数飛翔 している	 雄成虫、黒色、9~11mm	メスアカケバエ (ハエ目ケバエ科)	幼虫は森林内で落ち葉などを食べて生活する。 成虫は早春に平地や低地山に出現し、群飛する。 日本全土に分布する。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
玄関やガレージの壁に幼虫がみられる	 成虫、茶褐色、約 13mm	ウチジロマイマイ (チョウ目ドクガ科)	幼虫あるいは卵で越冬する。 幼虫は春と早秋に見られる。 幼虫はほとんど繭を作らず、蛹化する。 住宅地内のヒノキ、ビャクシン、ハイビャクシン等の樹木に発生する。 日本全土に分布する。
玄関の縁(木製)に幼虫が付着	 成虫、茶褐色、約 13mm	ウチジロマイマイ (チョウ目ドクガ科)	幼虫あるいは卵で越冬する。 幼虫は春と早秋に見られる。 幼虫はほとんど繭を作らず、蛹化する。 住宅地内のヒノキ、ビャクシン、ハイビャクシン等の樹木に発生する。 日本全土に分布する。
家の周辺を大量飛翔する	 成虫、黒色、約 13mm	ムツヒゲキクイゾウムシ (コウチュウ目ゾウムシ科)	スギ、ヒノキ材の腐食部に生息する。 本州、九州に分布する。

【 検査研究課 医動物担当 】

残留農薬検査(その1)

当所では、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より農作物当たりの検査項目数を追加し、検査体制を一層強化しています。

今回は、平成24年4月から5月の期間に食品専門監視班より搬入された農作物等の検査結果を報告します。

1 市内産農作物

4月に搬入されたかぶの根、かぶの葉、こまつな、トマト及びほうれんそう(各3検体)、5月に搬入されたキャベツ及びきゅうり(各3検体)の計21検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、かぶの葉1検体、こまつな1検体、トマト1検体、ほうれんそう1検体及びきゅうり2検体から農薬が検出されました。このうち、かぶの葉1検体から基準値(一律基準値0.01ppm)を超えるルフェヌロン^{*}が0.05ppm検出されました。ルフェヌロンはかぶへの使用は認められていないため、誤って使用した、もしくは近隣の農作物に使用したものが飛散して付着した等の可能性が考えられます。

検査項目及び検出限界については表2に示しました。

※農薬の概要については、4ページからの【農薬解説】を参考にしてください。

2 輸入農作物

5月に搬入されたオレンジ、キウイ、レモン(各1検体)及びグレープフルーツ(3検体)の計6検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、オレンジ1検体、グレープフルーツ1検体及びレモン1検体から農薬が検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。

検査項目及び検出限界については表2に示しました。

表1 残留農薬検査結果

(H24年4月～H24年5月)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
市内産農作物						
かぶの根	横浜市	3	0			
かぶの葉	横浜市	3	1	ルフェヌロン	0.05	*0.01
キャベツ	横浜市	3	0			
きゅうり	横浜市	3	1	ホスチアゼート	0.02	0.2
				ホスチアゼート	0.03	0.2
				チアメトキサム	0.03	0.5
こまつな	横浜市	3	1	フルフェノクスロン	0.06	10
トマト	横浜市	3	1	フルバリネート	0.04	0.5
				イミダクロプリド	0.01	2
				ボスカリド	0.22	5
ほうれんそう	横浜市	3	1	トルクロホスメチル	0.02	2.0
				テフルトリン	0.01	0.5
				イミダクロプリド	0.02	15
				フルフェノクスロン	0.07	10
輸入農作物						
オレンジ	アメリカ	1	1	クロルピリホス	0.28	1
キウイ	ニュージーランド [*]	1	0			
グレープフルーツ	アメリカ	3	1	フェンプロパトリン	0.04	5
レモン	アメリカ	1	1	クロルピリホス	0.03	1
				フルジオキシニル	1.8	10

*0.01 : 一律基準値

表2 農薬の検査項目及び検出限界(114項目)

農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)
BHC(α、β、γ及びδの和)	0.005	シハロトリン	0.01	フェニトロチオン	0.01
DDT(DDE、DDD及びDDTの和※)	0.005	シフルトリン	0.01	フェンクロルホス	0.01
EPN	0.01	シペルメトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01
アクリナトリン	0.01	ジメチルピビンホス	0.01	フェンチオン	0.01
アセタミプリド	0.01	ジメトエート	0.01	フェントエート	0.01
アゾキシストロビン	0.01	シメトリン	0.01	フェンバレレート	0.01
アルドリン及びディルドリン	0.005	スルプロホス	0.01	フェンピロキシメート	0.01
イソフェンホス	0.01	ダイアジノン	0.01	フェンプロパトリン	0.01
イソプロカルブ	0.01	チアクロプリド	0.01	ブタクロール	0.01
イプロベンホス	0.01	チアメキサム	0.01	ブタミホス	0.01
イミダクロプリド	0.01	チオベンカルブ	0.01	ブプロフェジン	0.01
インドキサカルブ	0.01	チフルザミド	0.01	フルジオキシニル	0.01
エスプロカルブ	0.01	テトラクロルピビンホス	0.01	フルシトリネート	0.01
エチオン	0.01	テトラコナゾール	0.01	フルトラニル	0.01
エトプロホス	0.005	テトラジホン	0.01	フルバリネート	0.01
エトリムホス	0.01	テブコナゾール	0.01	フルフェノクスロン	0.01
エンドスルファン(α及びβの和)	0.005	テブフェノジド	0.01	プロシミドン	0.01
エンドリン	0.005	テブフェンピラド	0.01	プロチオホス	0.01
オキサミル	0.01	テフルトリン	0.01	プロパホス	0.01
カズサホス	0.01	テフルベンズロン	0.01	プロピザミド	0.01
カフェンストロール	0.01	デルタメトリン及びトラロメトリン	0.01	プロメカルブ	0.01
カルバリル	0.01	テルブホス	0.005	ブromoプロピレート	0.01
クレゾキシムメチル	0.01	トリアジメノール	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
クロチアニジン	0.01	トリアジメホン	0.01	ヘキサフルムロン	0.01
クロマフェノジド	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ヘブタクロル(エボキシドを含む)	0.005
クロルピリホス	0.01	パラチオン	0.01	ペルメトリン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオンメチル	0.01	ペンコナゾール	0.01
クロルフェナピル	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	ホサロン	0.01
クロルフェンソン	0.01	ピフェントリン	0.01	ボスカリド	0.01
クロルフェンピビンホス	0.01	ピペロホス	0.01	マラチオン	0.01
クロルプロファム	0.01	ピラクロストロビン	0.01	ミクロブタニル	0.01
クロロクスロン	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メチダチオン	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリブチカルブ	0.01	メキシフェノジド	0.01
シアノホス	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	メトラクロール	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	メビンホス	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	ピリミホスメチル	0.01	リニューロン	0.01
ジクロラン	0.01	ピリメタニル	0.01	リンデン(γ-BHC)	0.002
ジコホール	0.01	フェナリモル	0.01	ルフェヌロン	0.01

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

平成24年度より、2項目(ピリメタニル、フルフェノクスロン)追加し、1項目(メトリブジン)削除しました。

【農薬解説】

ルフェヌロン

『マッチ』などの商品名で販売されている殺虫剤です。昆虫表皮の主成分であるキチンの生合成を阻害するため、幼虫は正常な脱皮ができず死に至ります。鱗翅目害虫の幼虫、アザミウマ目のチャノメキイロアザミウマの幼虫に対して高い防除効果を示し、効果は長期間持続します。

りんご、キャベツ、はくさい、なす、トマト等多くの農作物に適用があります。

※参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2011年版
- ・農薬残留分析法研究班、最新農薬の残留分析法(改訂版)

【 検査研究課 微量汚染物担当 】

平成23年度薬事検査について

平成23年度は健康福祉局医療安全課の依頼により、いわゆる健康食品の試買検査及び健康被害事例の原因究明等について検査を実施しました。

1 いわゆる健康食品等の検査

「ダイエット」、「痩身」等を標榜している「いわゆる健康食品」10検体について、センナ、フェンフルラミン、N-ニトロソフェンフルラミン、エフェドリン、プソイドエフェドリン、メチルエフェドリン、ノルエフェドリン、甲状腺ホルモンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

また、強壮効果を標榜する「いわゆる健康食品」10検体について、シルデナフィル、タダラフィル、バルデナフィル、ホンデナフィル、キサントアントラフィル、チオキナピペリフィル、メチルテストステロン、ヨヒンビンの検査を行いました。その結果、ヨヒンビンが1検体から検出されました。

さらに、ヘアケアを標榜する「いわゆる健康食品」10検体について、ミノキシジル、フィナステリド、デュタステリド、エストラジオール安息香酸エステルを検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

2 健康被害に係わる検査

医療安全課の依頼により、健康被害の疑われる事例の8検体について、原因究明のための検査を行いました。その結果、医薬品成分としてジアゼパム、甲状腺ホルモンがそれぞれ1検体から、フェンテルミン、フルオキセチンがそれぞれ2検体から検出されました。さらに、ピサコジルとジオクチルスルホサキシネートが1検体から検出されました。各医薬品成分につきましては、厚生労働省ホームページ(<http://www.mhlw.go.jp/kinkyu/diet/jirei/030902-1.html>)を参照して下さい。

【 検査研究課 薬事担当 】

遺伝子組換え食品の検査

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認後、国内で製造・輸入・販売などが可能になります。検査は、承認済みのものについては定量検査(食品中に遺伝子組換え体がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行います。一方、未承認のものについては定性検査(食品中に遺伝子組換え体が含まれているかを調べる検査)を行います。

平成24年5月に、各区福祉保健センターが収去した30検体について、遺伝子組換え食品の検査を実施しました。

1 定量検査

豆腐19検体及び枝豆1検体について、ラウンドアップ・レディー・大豆^{*1}の定量検査を行いました。これらのうち19検体は「遺伝子組換えでない」と表示があり(任意表示)、1検体は遺伝子組換えに関する表示はありませんでした。分別生産流通管理^{*2}が適切に実施されていなかったり、意図的に混入した場合、「遺伝子組換え不分別」もしくは「遺伝子組換え」と表示する必要があります。

定量検査の結果、いずれも混入率は5%以下^{*3}であり、違反検体はありませんでした(表1)。

表1 ラウンドアップ・レディー・大豆の検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体
豆腐	日本	19	0
枝豆	日本	1	0
計		20	0

*1 除草剤耐性を持つ遺伝子を組み込んだ大豆です。日本では、平成13年に安全性審査を経て承認されています。

*2 遺伝子組換え農作物と非遺伝子組換え農作物を生産・流通・加工の各段階で混入が起こらないよう管理し、そのことが書類等により証明されていることをいいます。

*3 分別生産流通管理が適切に行われた場合でも、遺伝子組換え農作物の一定の混入は避けられないことから、大豆では5%以下の意図せざる混入が認められています。

2 定性検査

トウモロコシ加工品(菓子類)10検体について、Bt10トウモロコシ^{*4}の定性検査を行いました。その結果、いずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表2)。

表2 Bt10トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	検出数
トウモロコシ加工品(菓子類)	日本	10	0

*4 除草剤耐性と害虫抵抗性を持つ遺伝子を組み込んだトウモロコシです。過去にアメリカで安全性審査が行われていない種子が誤って流通し、栽培された事例がありました。日本で安全性審査が行われていないため、食品衛生法により販売等が認められていません。

【 検査研究課 食品添加物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 6月

《今月のトピックス》

- 咽頭結膜熱の報告数が増加しています。
- A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数が増加しています。
- マイコプラズマ肺炎の報告数が昨年と比べて多い状況が続いています。
- 夏季に向けて、腸管出血性大腸菌感染症に注意が必要です。

全数把握疾患

<腸管出血性大腸菌感染症>

21 件(O157 H7VT1VT2 9 件、O157 VT1VT2 12 件)の報告があり、うち 14 件(有症状者 8 名、無症状保菌者 6 名)は、大和市の同一の焼肉店での食中毒によるものです。他の 7 件については現在原因調査中です。通常、O157 などの菌は家畜の腸内に存在し、新鮮な肉でも表面に菌が付着している可能性があります。O157 食中毒予防のためには肉の中心部までよく加熱(75℃で1分間以上)しましょう。また、生肉を箸でつまんだ際に O157 が箸に付着する可能性があるため、生肉を焼き網に載せる箸と、食べるのに使う箸は別にしたり、トングを使用しましょう。さらに、特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者では、溶血性尿毒症候群(Hemolytic Uremic Syndrome:HUS)など重症化することがあるので、焼肉の喫食等には十分に注意しましょう。なお、感染者から 2 次感染することがあり、予防には手洗いが重要です。本疾患は例年夏季に感染者数のピークを迎えるので今後の注意がひきつづき必要です。

- ◆ 啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

<レジオネラ症>

ポンティアック型2件、肺炎型2件の報告がありました。ポンティアック型2件は60代、70代で、どちらも感染経路等は不明でした。肺炎型2件は80代、60代で、1件は自宅浴槽からPCR、培養検査とも陽性でした。もう1件は自宅浴槽からPCR陽性、培養検査中です。どちらも同居家族等の明らかな感染は認められませんでした。レジオネラ症には肺炎型とポンティアック型(ポンティアック熱)があり、レジオネラを含んだエアロゾルの曝露を受けた人たちから、0.1%-5%が肺炎型を発病することがあるのに対し、ポンティアック熱の集団発生が見られる場合には、レジオネラを含んだエアロゾルの曝露を受けた人たちの約90%がポンティアック熱を発病します。肺炎型は重症化することも多いですが、ポンティアック熱は、突然の発熱、悪寒、筋肉痛で始まるものの、一過性で治癒するため、集団発生でないと報告されにくいと言われています。

<アメーバ赤痢>

腸管アメーバ症2件、腸管外アメーバ症3件の報告がありました。腸管アメーバ症2件のうち、1件はインドでの経口感染が推定されており、もう1件は感染経路感染地域等不明です。腸管外アメーバ症3件はすべて肝膿瘍で、国内での異性間性的接触による感染が推定されています。

<梅毒>

2 件の報告がありました。1 件は早期顕症梅毒Ⅱ期で、異性間性的接触でフィリピンセブ島での感染が推定されています。もう 1 件は無症状病原体保有者で、国内での異性間性的接触が推定されています。

<風しん>

2 件の報告がありました。1 件は 20 代で発熱と発疹があり、IgM 上昇のため診断となりました。予防接種

歴は不明です。もう1件は40代で、発熱、発疹やリンパ節腫脹などの臨床症状とペア血清による抗体陽転化のため診断となりました。予防接種歴はありませんでした。

定点把握疾患

平成24年5月28日から平成24年6月24日まで(平成24年第22週から平成24年第25週まで。ただし、性感染症については平成24年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成24年 週一月日対照表

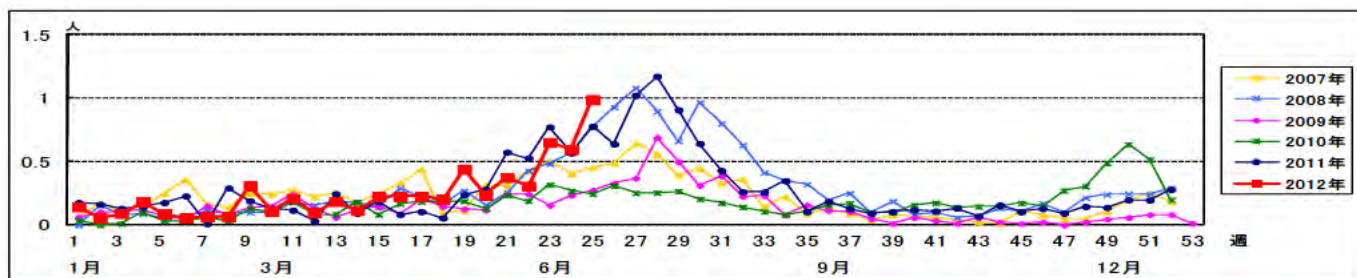
第22週	5月28日～6月3日
第23週	6月4日～10日
第24週	6月11日～17日
第25週	6月18日～24日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

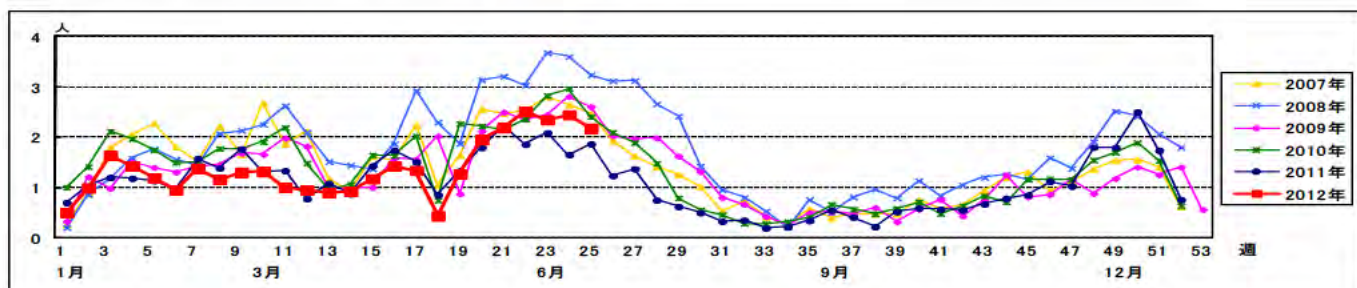
<咽頭結膜熱>

市全体で第25週0.99と増加しています。泉区では13.00と警報レベルを上回りました。例年夏季に流行する疾患なので、今後の注意が必要です。予防対策は、うがいや手洗いが重要です。また、プールの前後はシャワーをよく浴びるようにしましょう。学校保健安全法上は、第二種の学校感染症に分類され、出席停止の対象となっており、登校基準は「主要症状が消退した後2日を経過するまで出席停止とする。ただし、病状により伝染のおそれがないと認められたときはこの限りではない。」とされています。



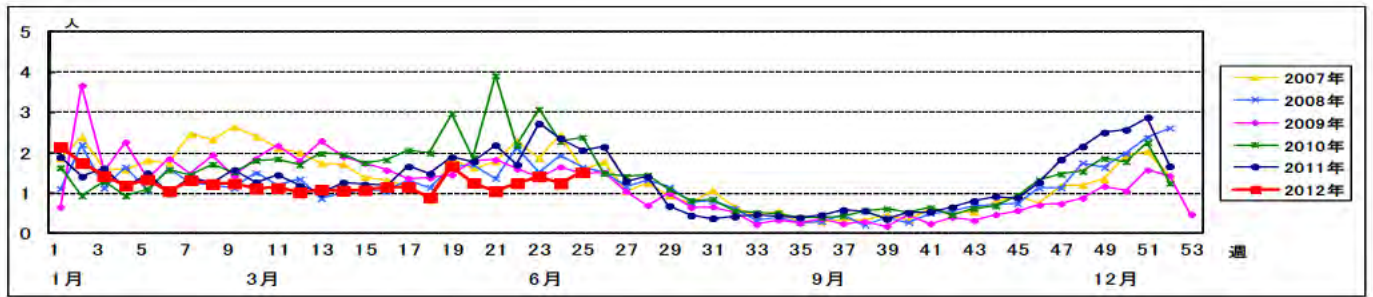
<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

市全体で第22週に2.51と増加傾向でしたが、第25週では2.18とやや減少しました。区別では瀬谷区で第23週8.25、第24週8.50、第25週7.50と警報レベルを上回る状態が継続しています。例年5月～8月にかけて報告数が増加するので、今後の注意が必要です。



<水痘>

市内全体で第25週1.52と落ち着いていますが、緑区で4.25と注意報レベルを上回っています。

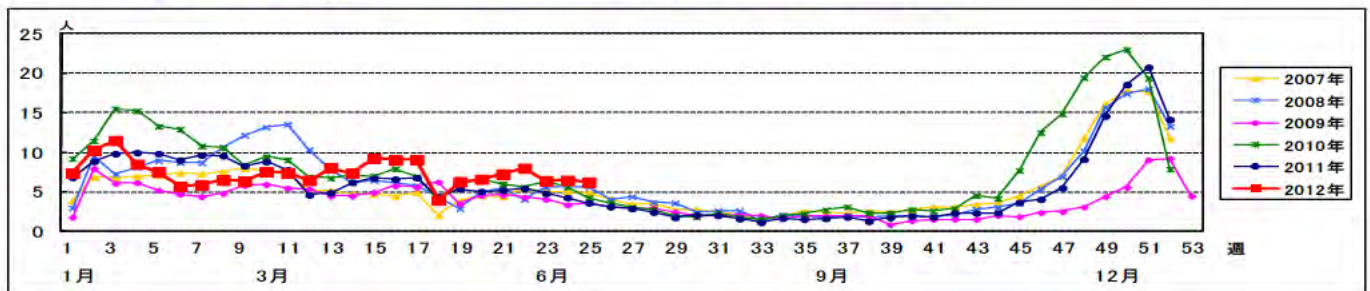


< 感染性胃腸炎 >

市内全体、区別でも警報レベル(定点あたり 20.0 以上)を大きく下回っていますが、例年に比べて報告数がやや多い状態が継続しています。

◆横浜市衛生研究所:次亜塩素酸の詳しい使用方法

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/noro-yobou.pdf>



< 性感染症 >

5月は、性器クラミジア感染症は男性が25件、女性が12件でした。性器ヘルペス感染症は男性が5件、女性が8件です。尖圭コンジローマは男性4件、女性が3件でした。淋菌感染症は男性が13件、女性が0件でした。

< 基幹定点週報 >

マイコプラズマ肺炎は全国的に流行しており、特に昨年度末は1.60~1.40(例年定点あたり0.2~0.6程度で推移)と増加しました。最近では、22週0.83、23週0.88、24週0.82、25週0.90と落ち着いてきたものの、例年を上回る状態が持続しています。横浜市でも第22週0.00、23週2.50、24週1.00、25週2.00と、前シーズンの第22週0.50、第23週0.50、第24週1.00、25週0.33をやや上回っています。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

< 基幹定点月報 >

5月は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症6件で、薬剤耐性緑膿菌感染症、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点49件(鼻咽頭ぬぐい液43件、ふん便6件)、眼科定点1件(眼脂)、基幹定点6件(鼻咽頭ぬぐい液2件、髄液2件、気管吸引液1件、喀痰1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎23人、下気道炎11人、胃腸炎6人、りんご病3人、アデノウイルス感染症3人、ヘルパンギーナ2人、発疹症1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点は急性肺炎2人、意識障害、心筋症疑い、風疹、不明熱各1人でした。

7月10日現在、小児科定点のアデノウイルス感染症患者2人、上気道炎患者2人、急性胃腸炎患者2人からアデノウイルスが分離されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

6月の感染性胃腸炎関係の受付は、基幹定点から菌株受付が16件、定点以外の医療機関等からは11件あり、腸管出血性大腸菌(O157:H7 VT1&2、O157:H7 VT2、O145:H- VT1)、腸管毒素性大腸菌(O159:H- ST)、腸管病原性大腸菌(O119:H21)、カンピロバクターが検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点から10件で、A群溶血性レンサ球菌が9件検出されました。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(6月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	6月			2012年1月～6月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌						2
腸管病原性大腸菌		1			2	
腸管出血性大腸菌		2	6		2	14
腸管毒素原性大腸菌		1			2	
チフス菌					1	
パラチフスA菌					2	
サルモネラ					20	3
カンピロバクター			2			2
コレラ菌						2
不検出	0	12	3	0	76	11

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	6月			2012年1月～6月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌	T1	5		9		
	T6	4		6		
	T4			2		
	T12			10		
	T25			1		
	T28			3		
	T B3264			3		
B群溶血性レンサ球菌			2			13
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			4	
バンコマイシン耐性腸球菌					1	2
<i>Legionella pneumophila</i>			1			1
インフルエンザ菌				6		2
肺炎球菌				2		
黄色ブドウ球菌				1		
破傷風菌					1	
結核菌			3			3
<i>Mycobacterium avium</i>						1
不検出	1	0	12	15	6	28

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成24年5月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成24年6月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成24年5月のアクセス件数、アクセス順位及び平成24年6月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成24年5月)

平成24年5月の総アクセス数は、171,312件でした。主な内訳は、感染症63.7%、食品衛生14.4%、保健情報7.0%、検査情報月報4.9%、生活環境衛生2.3%、薬事1.2%でした。

(2) アクセス順位 (平成24年5月)

5月のアクセス順位(表1)は、第1位が「クリプトコッカス症について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「トキソプラズマ症について」でした。

5月の総アクセス数は、前月比で約41%の増加となっています。今月は「クリプトコッカス症について」と「トキソプラズマ症について」が上位に入ってきました。トキソプラズマ症については、5月の報道番組で特集された影響と、衛生研究所ホームページ内の「健康な妊娠・出産のために注意したい感染症について」の更新があり、その中でトキソプラズマ症の項目が掲載されている関係と考えられます。また、マイコプラズマ肺炎は、年間を通じて常にアクセス件数が多くなっています。国立感染症情報センターの報告によると、マイコプラズマ肺炎の定点当たり報告数は、平成24年第20週(5月14日～20日)で0.79、第21週(5月21日～27日)で0.95と上昇し、第22週(5月28日～6月3日)で0.83と高い水準を維持しています。

厚生労働省のマイコプラズマ肺炎に関するQ&A(一般の人向け) 平成23年12月

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou30/index.html>

「クリプトコッカス症について」の関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/cryptococcosis1.html>

「トキソプラズマ症について」の関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/toxoplasma1.html>

表1 平成24年5月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	クリプトコッカス症について	11,393
2	マイコプラズマ肺炎について	7,224
3	トキソプラズマ症について	4,282
4	衛生研究所トップページ	3,969
5	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	3,537
6	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	3,442
7	サイトメガロウイルス感染症について	2,982
8	ぎょう虫(蟯虫)症について	2,424
9	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,408
10	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	2,062

データ提供:総務局IT活用推進課

「健康な妊娠・出産のために注意したい感染症について」の関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/ninshin1.html>

「ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について」は、単独の不活化ポリオワクチンの導入時期が、9月に予定されていることから関心の高さが続いています。

厚生労働省のポリオとポリオワクチンの基礎知識(平成24年5月18日改定)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/ga.html>

(3) 電子メールによる問い合わせ(平成24年6月)

平成24年6月の問い合わせは、3件でした(表2)。

表2 平成24年6月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
アメーバ赤痢の国内の年間届出患者数について	1	感染症・疫学情報課
アメーバ赤痢の男女別等の報告数について	1	感染症・疫学情報課
当所WEBの食品添加物キシリトール記載部分の一部誤植について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事(平成24年6月)

平成24年6月に追加・更新した主な記事は、8件でした(表3)。

表3 平成24年6月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
6月 5日	感染症に気をつけよう(6月号)	追加
6月 6日	麻疹(はしか)について	更新
6月 7日	クリプトコッカス症について	更新
6月 7日	病原体定点からのウイルス検出状況について	更新
6月14日	死亡率・致死率(致命率)・死亡割合について	更新
6月15日	熱中症情報について	更新
6月15日	マイコプラズマ肺炎について	更新
6月21日	狂犬病およびリケッチアウイルス感染症について	更新

【 感染症・疫学情報課 】